

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">鷺巣 奈保子 【人間発達科学専攻 2013年度生】</p>	要 旨
論文題目	<p>感謝, 心理的負債感, 「すまない」感情が 心理的 well-being に与える影響とそのメカニズム の検討</p>	<p>本論文では、感情心理学の立場から他者からの向社会的行動の受け手に生じる感謝感情をテーマとし、純粋な感謝（恩恵の受領に対する肯定的な感情）とともに生起する心理的負債感（返報義務感）と「すまない」という感情（相手の負担への罪悪感・詫びの気持ち）の相互の関係性及びそれらが個人の心理的 well-being に与える影響性とそのメカニズムについて実証的な探求がなされた。</p> <p>序論では、感謝概念をめぐる宗教思想も含め内外の関連する先行研究を幅広く取り扱い、感謝に関する心理学的研究の動向と本論文の位置付けについて論じている。本論では、予備調査を含め 6 つの実証研究を通して、感謝概念を構成する感謝・心理的負債感・すまない感情の 3 要素の共通点および相違点を明らかにするとともに、感謝感情を抱くことがどのようなメカニズムを通して個人の心理的 well-being につながるのか、対人的志向性の媒介機能に注目したモデル分析によって検討された。本論の第一部では、これまで明確な概念化がなされてこなかった「すまない」感情の尺度構成をおこないつつ 4 つの調査研究（総計対象者数 498 名）が実施され、心理的 well-being に対して、純粋な感謝は正の主効果が認められること、心理的負債感是对人的志向性を媒介して正の関連を持つこと、「すまない」感情は負の主効果を有することが明らかになり、3 要素の機能の多様性が示された。第二部では、「すまない」感情が肯定的な感謝に転換する心理的を含めて一定の結論を得ることに成功している。「すまない」感情がポジティブリフレーミングを経由して純粋な感謝に転換され、心理的 well-being への肯定的な関連性に至る媒介モデルを想定し、質問紙調査からモデルの妥当性について一定の結論を得ている。結論では、実証研究の総括をおこなうとともに、本論文の意義について、当該分野における感謝研究への貢献とともに、道徳教育やポジティブ心理療法への示唆についても論じられた。対象者が女子大学生に限定された論文であったため、男性や年齢を拡大した検証が必要であること、また変数間の因果関係性を同定するための縦断的研究の実施が必要であること等が今後の課題として述べられた。</p>
審 査 委 員	(主 査) 教 授 菅原 ますみ	
	(副 査) 教 授 大森 美香	
	(副 査) 教 授 石口 彰	
	(審査委員) 准教授 上原 泉	
	(審査委員) 教 授 岩壁 茂	